



新制作

会報 No.52

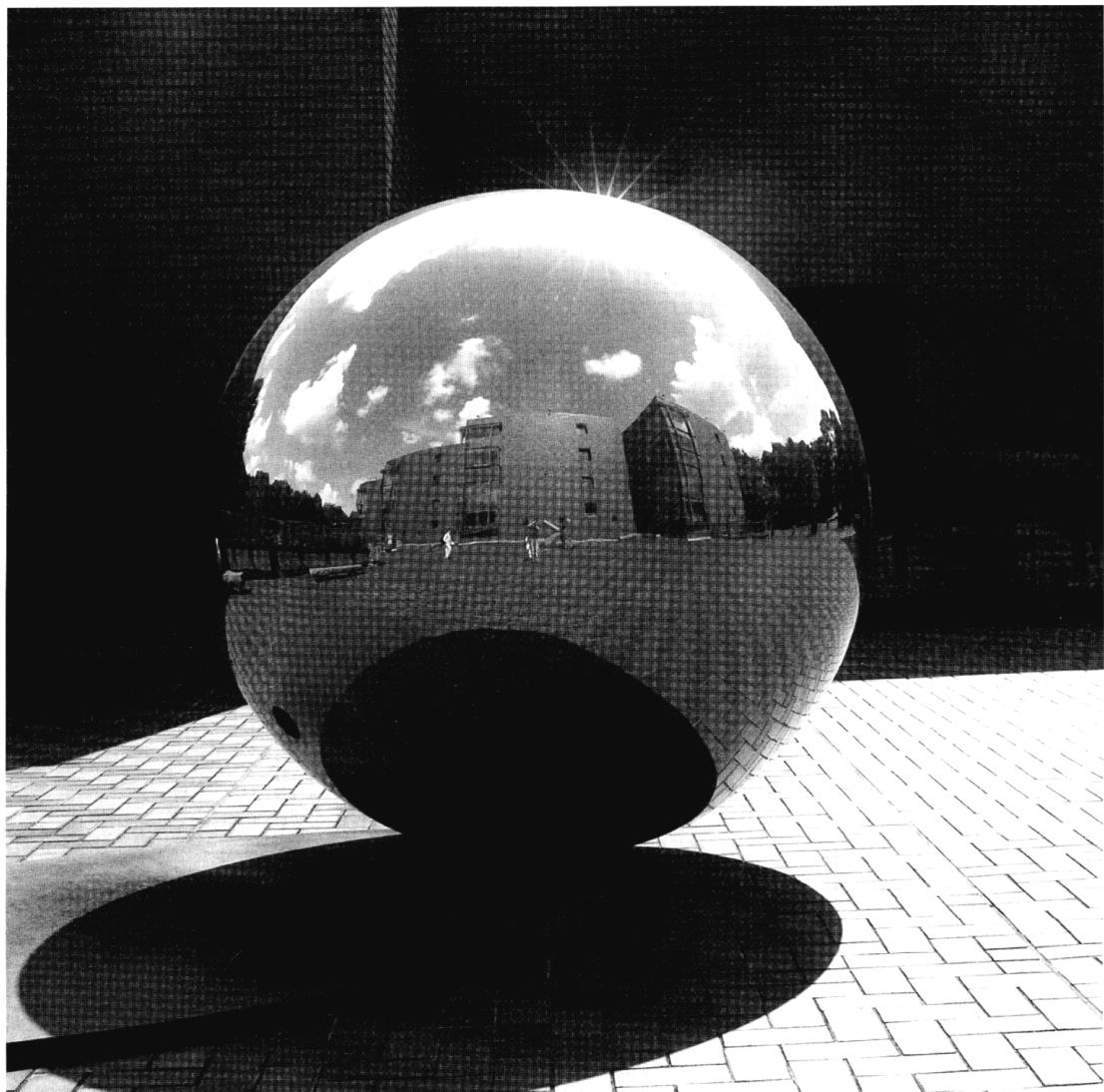
発行

2006年12月15日

編集・発行人

澄川喜一

発行 新制作協会 〒110-0013 東京都台東区入谷2-4-2 増田ビル202 Tel.03-5603-8350 Fax.03-5603-8360
<http://www.shinseisaku.jp/>



2006年・東京都美術館

新会員・受賞者紹介

新会員



秋葉直樹
あきはなおき

絵画部



一居弘美
いちいひろみ

◆新制作展にゆづくり育てて頂き、これ

からもずっと絵を描いていく自信もつきました。そして、第70回展という節目の年に新会員になることが出来て、本当にうれしく思っています。新制作展の新しい可能性の一部になれるよう、私自身が今を出発点として、可能性を試してみたいと思っています。

◆初めて新制作展を見た時、展示してある作品の完成度の高さに驚きました。自分の作品も並べてみたいと思いました。あれから一九年経ちました。落選した時の悔しさや思い通り描けなくて苦しい時期など、色々な思い出があります。先生方からいただいた言葉が励みになって出品を続けることが出来ました。

◆この度は会員に推举していただき、これからも自分の絵を目指していくと思います。今後ともよろしくお願ひします。

◆一九六五年福島県生まれ。多摩美術大学大学院修了。一九八八年第二回新制作展初入選。第68回、69回新制作展新作家賞受賞。

◆新制作展にゆづくり育てて頂け、これ

からも見慣れた野ぶどうの実、今秋はとりわけ感慨深い色付きを見せていました。

◆一九四一年山梨県生まれ。一九七三年第37回新制作展初入選。第67回、第69回新制作展新作家賞受賞。



竹内一
たけうちはじめ



竹内一
たけうちはじめ

彫刻部



大野春夫
おおのはるお

◆私は第50回新制作展が初入選で、このときの懇親会に小磯良平先生がおみえになっていたのを覚えています。それから二〇年が過ぎ去り、今年第70回展で会員推举していただきました。偶然にも会の

◆この度は会員に推举していただき、ありがとうございました。当初はなかなか実感として感じられなかつたのですが、少しづつ会員としての自覚と責任の重さを感じはじめています。今年で初出品から一四年が経ちました。自分の中では長かったたようですが、毎年制作に苦しみながらもあつという間に過ぎてしまいました。

◆一九六三年東京都生まれ。多摩美術大学油画専攻卒業。一九八七年第二回新制作展初入選。第66回、69回新制作展新作家賞受賞。

◆一九五五年群馬県生まれ。一九八一年東京造形大学美術学部彫刻科卒業。一九八八年第二回新制作展初入選。第61回、69回新制作展新作家賞受賞。



福本紀孝
ふくもととしとか

◆このたび念願の会員に推举され、喜び

これからも飛躍的には進まないが少しずつ色を重ね勇気を重ねていきたい。

いつも見慣れた野ぶどうの実、今秋はとりわけ感慨深い色付きを見せていました。

◆一九四一年山梨県生まれ。一九七三年第37回新制作展初入選。第67回、第69回新制作展新作家賞受賞。

◆一九六〇年埼玉県生まれ。一九八八年東京芸術大学大学院美術研究科油画専攻修了。一九九三年第57回新制作展初入選。

◆一九四一年山梨県生まれ。一九七三年第37回新制作展初入選。第67回、第69回新制作展新作家賞受賞。

と不安の入りまじった気持ちで次の仕事の原木を触っています。年輪を重ねて生きた木、環境によつても樹種によつても語らいは違うが、原木を前に自分の彫りたいものが観えたときの楽しみがその木の育つた年輪に同化し、ノコ、ノミによりその木との語らいが表現に繋がり、諸先輩方を見習い自分も頑張つてよい作品を造つていきたいと思います。

◆一九四七年岡山県生まれ。一九七〇年日本大学美術学科卒業。一九七一年第35回新制作展初入選。第36回、69回新制作展新作家賞受賞。

彫刻部
大野 匠(高知) 河西栄二(山梨)
木原智代(東京) 椎名良一(千葉)
新村優子(長野) 増井岳人(神奈川)
スペースデザイン部
大庭安仁(静岡) 川島源次郎(長崎)
高松智子(福島) 前田亮二(愛媛)

70回記念賞

絵画部 永田由利子(東京)
彫刻部 平田義之(長野)
スペースデザイン部 島田美和(神奈川)

新作家賞

絵画部 石倉郁美(群馬) 内山 正(東京)
柴田俊明(愛知) 新保甚平(石川)
関水英司(神奈川) 辻井久子(大阪)
手嶋醇子(愛知) 成尾勝己(広島)
永田由利子(東京) 松木正代(神奈川)
眞野眞理子(千葉) 馬淵哲(滋賀)
三浦正紀(愛知) 馬淵哲(滋賀)

第70回記念 新制作展



70回記念展
点描



審査・陳列

● 絵画部審査と陳列の報告 佐藤泰生

第70回展新制作絵画部の審査は、上野の都美術館で9月の5日と6日の二日間、フル回転で行われた。

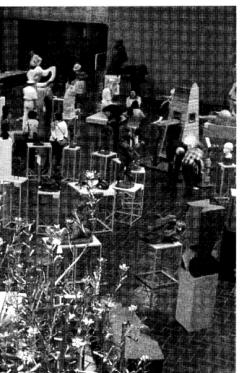
今年の絵画の応募点数は一〇三〇点、応募者は三九七名。昨年と比べ応募点数で一三五点増、応募者で四五人増となつた。最終審査の結果、入選者は二七〇名、入選点数が二七二点で初入選が三四名であつた。入選総数は昨年に比べ三〇人ほど減り二点入選も二名と厳しいものとなつた。新会員五名、新作家賞二三名、70回記念賞一名（新作家賞と記念賞のダブ

レ）、新制作の絵画部はどこへ向かうのか。モダニズムの言葉もとうに死語となつた。新会員五名、新作家賞二三名、70回記念賞一名（新作家賞と記念賞のダブ

レ）、新制作の絵画部はどこへ向かうのか。モダニズムの言葉もとうに死語となつた。新会員五名、新作家賞二三名、70回記念賞一名（新作家賞と記念賞のダブ



多少の破綻を恐れない「勇気ある表現」が確かに育つてることを痛感しました。団体展としての彫刻が生き残るとすればこの会を除いて考えられないし、さらには言えば、大きな発展と充実の可能性と「ある種の責任」を新制作に関わる全ての者が負っているのではないかと感じました。



● スペースデザイン部審査陳列について

山下勘太郎

今年の新制作展は第70回となり、例年以上の盛りを見せた展覧会であったといえるでしょう。審査進行係に当つた者として感想をお伝えします。

出品点数、出品者数ともに昨年より約一〇点一〇名減少し、審査の過程でもこの



● 勇気ある表現の場

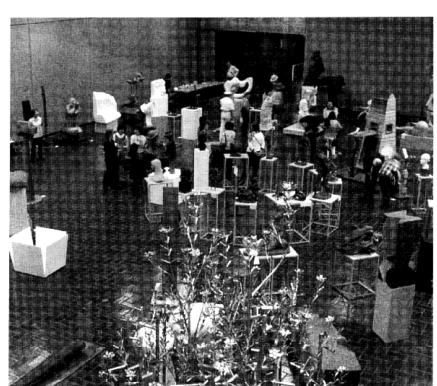
橋本裕臣

今年の新制作展は第70回となり、例年以上の盛りを見せた展覧会であったといえるでしょう。審査進行係に当つた者として感想をお伝えします。

出品点数、出品者数ともに昨年より約一〇点一〇名減少し、審査の過程でもこの

なんな作品ばかりで陳列がうまくできるのか心配したほどでした。ところが実際陳列してみると、70回を記念して会員と一般出品者とを別々の室にしたため、例年では見えたものが見えてきました。大彫刻室の中心に創立会員の作品を集め、その周囲を会員になった順に作品を配置したこと、落着いたよい空間になり、一般出品者の室は活気に満ち、見ごたえのある会場となりました。これは作品の質の高さを意味するものです。従来この会が大切にしてきた「質の高い」「ひかれめで上品な」「完成度のある」表現がややもすると「救いがたいアカデミズムや権威主義」に結びつきやすい問題がありました。

今年はそれを突き破るエネルギーと、





第18回展審査風景（1954年）

して使うことで、入選作品を増やすことが出来ました。あいにく、展示にはやや不向きなスペースではありましたが、来年以降の国立新美術館への移行によつて良い方向に変わっていくと思います。

床置き作品では、動く、光る、材料の工夫等、目新しいものが増え变化に富んだ展示になつて、見る人が楽しんでいる雰囲気はSD部の会場ならではのものかもしれません、そういったアイデアに

重きを置いた作品の審査には、今後、新たな視点を持つ共通の認識が必要になつてくるのかもしれません。

毎年感じることですが、昨年まで出していた人の作品が見えないときの寂しさを今年も感じました。継続して出品して下さる方を増やし、対話を通して、作品を高めあつていけるような場としてのSD部に対する努力がなお一層必要なのかかもしれません。

新制作は光つてた！

渡辺 恭三

1950年頃からの新制作を中心の一高校生が見た美術事情を、時系列上の間違い多かろうかとは思いますが書いてみます。その頃はまだ新制作とは何の関係もない身なので、諸先生の名前は敬称略で記すことにします。

とにかく熱い時代でした。

焼け野原から朝鮮戦争へ空腹を抱えて何もないような生活の中で、それでいて何でも出来た時代でした。原爆の因を見たのは50年でした。二科は大作主義で500号1000号と力作が並び、自由美術は戦後の良心と呼ばれた少し左翼系の池袋モンパルナスチックなロマン主義が窺えました。独立は力が漲っていました。50年に林武が「流る女」で毎日賞をとり、充実していましたが、会全体とし



て日本の念力フォーヴでちょっと疲れなという感があります。一水会はビルツとしているのはオントタイの安井曾太郎だけだし、創世紀のモダンアートも山口薫以外に特に惹かれるものも見当たりません。団体連合展は一つの見本市のようなものでした。ここでは新制作が特に新鮮でした。批評家の太御所的存在の柳亮が、「新制作はアロハシャツのようもない」と酷評し、猪熊弦郎が強く反発しました。上野の表慶館でマチス展があり、ラッシュの電車のようにモミクシャな中でこれを見たものでした。

僕はといえば、勉強しないで行けそうな大学といえは芸大かな……と思って三四年の夏休みに阿佐ヶ谷研究所へ行きました。阿佐ヶ谷の先生で光風会の熊谷九寿が「ここは受験のための研究所ではあるが、それでも美術というものに初めて本格的にとりくんだ所になるのだ。受験だけが目的ではない。今、是非見てほし

い個展がある……」と、絶賛したのが宮脇公實でした。駿河台下の竹見屋画廊は凄くいい個展ばかりしていました。次にここで見たのが赤穴宏でした。やつぱり新制作はいいと特に注目するようになります。

毎日国際展はかなり早い時期からボロツクやデュビュッフェ、レームデン、エッシャー、レメディオス・パロなどを紹介していますが、それでも当時日本への影響という点ではサロン・ド・メの来日でのアンドレ・マルシャンの海の太陽、サンジエやマネッシエ、ミナー、ロルジユ等の方でした。ビュッフェも見ているような気がするのですが、あるいは印刷物だけだったか……。

新制作は、建築部が出来てすぐ5年だつたかに大陳列室に定期的なディスプレーをして、これがその後の展示場の手本となりました。新制作は創立会員をはじめとする第一世代の殆どが大活躍中でし

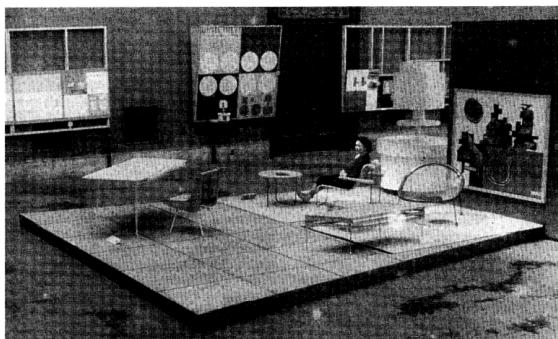
たし（中西、野田は既に世にありませんが）第二世代も荻、竹谷、風間、若いところでは宮脇、玉置、赤穴……戦後美術界復興の担い手、それが新制作でした。（他にも多勢いますが煩雑になるのでやめます。荻、竹谷を除いて全員が協友でした。）

話を僕に戻すと、既に一浪していましたが受験用の研究所はやめていました。

今度芸大に落ちたら新制作の田園調布の研究所に行って、さらに芸大を目指すかどうかはその後で考えようと思って、ソーッと同研究所を偵察したりしてみました。うまいこと二浪はせずに芸大に受け星移り月易り四年生の時に新制作に出しました。その頃芸大からはあまり出しませんでした。一年上級に近藤竜男がいたけれど、間もなくニューヨークに行ってしまいました。同級の稻葉治夫が初入選で新作家賞をとったけれど、二度目落とされるといふら口説いても二ヤツとするだけで再び出そうとはしませんでした。

この頃、初入選で受賞というケースは他の団体でも結構あって、国画で平賀敬、佐々木豊、独立では僕と同級生の針生鎮郎が初入選で新人賞、二年目に独立賞、三年目に会員でした。この時代、新制作で華やかだったのは田園調布組でした。

後に続々と若手を輩出する多摩美勢もこつてからです。女子美勢も佐野ぬいさん



20回展 旧美術館建築部会場 (1956年)

立場ではなく、それを軸足にしてどれほど幅を許容しているかの美意識、あなたがち新の字にふさわしいとは言えないとこうです。そのしがらみの篩にかけられて選別されたものに今の時代をリードするものが残っているかどうか、新制作は世の審判にさらされなければならないでしょう。

(絵画部会員)

東京都美術館の想い出

五十嵐 芳三

都美館での新制作70回記念展は最後に、これから的新制作展は国立新美術館に移ることになりますが、新制作協会にて都美館での歴史は、この場所で旗揚げして生まれ、七〇年にわたる様々な発展と成長の歴史を刻んできたのです。

都美館といつても旧美術館の大彫刻室は、大きなドーム型で天井全面がガラス窓であったので、現在のような人工光線ではなく大変自然で落ち着いたものでした。私は戦時中からこの会場での様々な展覧会によって刺激を受けてきたものです。

新制作の彫刻部は、初めの頃は出品者の人数もごくわずかで、上階の絵画の一室を使用し、発表作も小品が主でしたが、私が初出品した第13回展より、建築部新設と共に大彫刻室に彫刻を展示し、絵画・彫刻・建築の三部合同の展示をした

のが多く出品されてきましたのです。

また、大戦中途絶えていた海外の情報も、終戦になつてもなかなか伝えられない状態でしたが、漸く外国作家の作品が毎日新聞社による国際展に発表されました。その中で特に彫刻ではイタリアのグレコとファッチーニの二点のブロンズ作品でしたが、私達彫刻を学ぶ者にとって大変に新鮮な驚きであつたことを、今改めて想い出すのです。

その頃新制作展に出品していた私達も競つて新しい表現を探しながら、発表作品も大きくなり仲間同士の意気込みは大変なものでした。



70回記念展にて

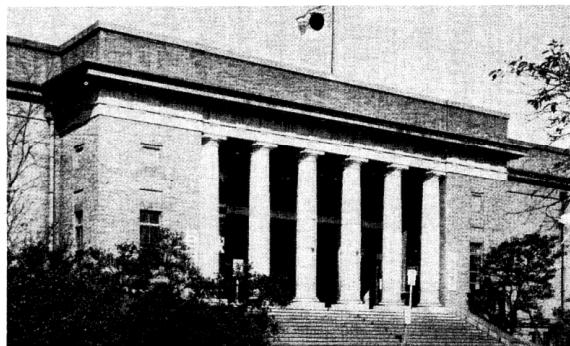
さて、来年度からは国立新美術館に、今までとは違う環境と明るく広い空間が展覧会場になりますが、これを機に新制

なれば我々の美意識も（自分の制作上の

それが新制作でした。

作も展示の方法や三部から成る会のあり方を含めて、新時代の意識を造り上げていかなければならぬと思うのです。

（彫刻部会員）



旧東京都美術館正面（東京都美術館提供）

僕が初めて新制作展を観たのは、上野の旧東京都美術館で、第12回展（昭和23年（一九四八年））であった。口の字型に絵画の展示室に囲まれ、白の遮光幕を通して天井からの自然光の彫刻室には、多くの裸婦像などが生きいきと並んでいた。その中で今も鮮明に思い出されるのは、菊池一雄さんの自刻像である。戦地に出

は毎年開かれた。先輩達の制作、創造への情熱の強さに頭が下がる。

71回展は、新国立美術館で開催される。

今一度先輩達が美術にかけた精神を受継ぎ、展覧会をさらに盛上げたいものである。

最後に一九七四年まで新制作展の会場であつた、旧東京都美術館につき記した。建つてはいた場所は現在の都美術館と國立博物館の間、今は樹々が繁つていて、場所にあつた。正面の幅広い階段の上には、ギリシャ神殿の正面を思わせる、六本の白い円柱が並んでいた。外側は無飾のレンガ壁で造られ、周りの樹々の緑に調和した堂々とした建物であつた。写真を掲げ往時を偲び、建物に感謝を捧げたい。

（彫刻部会員）

征するにあたり、もし戦死したとき、彫刻家として在りし日の姿を残すべく制作した作品で、無事復員されて発表したものと聞いた。

上野の山は幸い空襲をまぬがれ、美術館、博物館、寺院、学校、動物園などほとんどが残った。しかし公園の中には、現在の噴水池の辺りに、高射砲陣地跡があり、夏草が生い繁り、蛇や野羊を見かけたなど荒廃していた。戦争中、ある者は兵士として戦地で戦い、残つた者も、空襲による爆弾、焼夷弾の中を逃げまどい、家を失い、おまけに食糧もほとんどなく、全てが命がけであった。そんな状況の中、敗戦を迎えた昭和20年を除き、新制作展

は毎年開かれた。先輩達の制作、創造への情熱の強さに頭が下がる。

建築部から スベース・デザイン部へ そして…

小野かおる・森史夫

第70回展で、SD部の作品展示の一角に「建築部創設の頃」を映像で紹介しました。その内容は、昨今発表された、船曳悦子氏の神戸大学大学院修士論文「日本貿易博覧会（神戸博、1950）における新制作協会建築部の活動について」から多くの引用に依っています。丹念に調べ上げられた一万字を超す論文から、創設直後の建築部の活動を知る貴重な記録として、一部抜粋して紹介させていた

だきました。なお、当時の協会の名称は「新制作派協会」でしたが、論文では便用として「新制作協会」を用いています。宜上「新制作協会」を用いています。

建築部設立後間もない1949年3月、神戸博の会場計画を新制作協会建築部で受けないかという打診が、同協会会員で神戸在住の画家・小磯良平を通じてもたらされた。このときの状況を、岡田哲郎は次のように述べている。「去年の三月であつた。画家小磯良平君から神戸で博覧会ができる。新制作派の建築部で設計をやるなら紹介してもいい、といつてきました。さつそく建築部会を開いて相談した結果、全面的にまかせてもらえるなら引き受けよう、といふことになった。そこで山口文象君と私が代表で神戸に出向いた」。『神戸博準備協議会』の設置（4月19日）は、この一ヶ月後のことである。



現在の東京都美術館

を掲げ、そのテーマを実現するために、サブテーマとして「序曲」「資源」「世界」「生産」「通商」「文化」「終曲」の7部に分けられた。そして、新制作協会建築部はそのサブテーマをパビリオンのコンセプトとして空間化し、主要パビリオン10棟を計画した。「終曲」にあたるテーマセンターには、平和の象徴として「ほほえめる女神像」が新制作協会彫刻部の会員によつて制作された。

プロムナードなどの移動空間は、視覚環境としての位置付けがなされている。

序曲館の東館と西館をつなぐ渡り廊下、テーマセンター（ほほえめる女神像）、第一通商館前のプロムナードはいずれも一直線上にあり、会場を一望する時の視覚的効果がねらわれている。世界館から手工業実演館へは動線に沿つて「主題立像」（各テーマ館を象徴する彫刻）が配置されている。

バタフライ屋根のパビリオンや移動空間のためのプロムナードには吊り構造による立体交差、序曲館の渡り廊下には連続ヴォールトなどが用いられ、新しい構造技術がデザイン要素として視覚環境に配慮した造形性が認められる。ボールに掲げられた旗、パビリオンにはクリーム色や薄緑といった明るい色調が用いられ、博覧会として新鮮さとともに祝祭性を醸し出していた。

そこでは、ピューポイントとランドマークの効果的な配置における建築家と美

術家の連携が認められる。このように、神戸博では両者の協同により一体的な視覚環境としての博覧会場が出現した。

神戸博は設立間もない建築部と絵画部、彫刻部の三部合同の成功作品でした。

その後、建築部は32回展（1969）にスペースデザイン部と改称しました。そして2006年、70回展も無事上野の東京都美術館で終了。71回展は新美術館でということもあって、考えなくては

施設設計による新制作協会の分担 (前掲論文より抜粋)		
新制作協会 建築部	岡田哲郎	神戸市と会場計画について交渉 日本貿易産業博覧会企画委員会（建築家）
	吉村順三	日本貿易産業博覧会企画委員会（展示家）
	山口文象	神戸市と会場計画について交渉
	山口文象建築事務所	
		切符売店 装飾壁 入口 入口事務所 装飾壁売店 序曲館（設計） 野外劇場 出口事務所
	丹下健三	主体立像の台座
	小槻貴一	入口外観構成計画
	浅田 孝 大谷幸夫 小槻貴一	序曲館（展示）
	河合正一 小槻貴一 柴田 寛	第二生産館（設計）
	河合正一	世界館（展示） テーマセンター（構成）
新制作協会 彫刻部	池部 陽 (池部陽研究室)	プロムナード 第一通商館 第二通商館 手工業実演館 喫茶室
	柳原義達 佐藤忠良 舟越保武	装飾壁レリーフ
	山本恪二	主題立像「通商」
	明日川孝	主題立像「資源」
	早川麿一郎	主題立像「平和」
	本郷 新	主題立像「生活」
	村田勝四郎	主題立像「文化」
新制作協会 絵画部	菊池一雄	日本貿易産業博覧会企画委員（彫刻） テーマセンター「ほほえめる女神像」
	小磯良平	神戸博を建築部に紹介 ポスター
	中西 勝	日本貿易産業博覧会企画委員（画家） 第二通商館の壁画



70回展ギャラリートーク

ならないことが山積しています。新制作に限ったことではなく、もう始まっている（美術）の動きと変化です。それを知るだけでも大変なのに、その中で公募展をどう考えたらよいか困難な問題です。テクノロジーの急激な発達によって、はやりの言葉でいえば「想定外」の作品の登場。その予兆はSD部にすでにあります。歓迎すべきことですが、感心ばかりしているわけにはいきません。時代の移り変りはいつもあることですが、このデジタル時代のハードルをどう超えるか、約60年を反芻すると共に、知恵を出し合って考えなければならないと思います。

(SD部会員)

70回記念展実行委員より

絵画部と70回記念展

高津 テツロウ



新制作、絵画部は昨年11月に創立会員で最後の大切な作家、脇田和先生を失ってしまいました。ご遺作4点を展示して追悼と敬意を表させていただきました。

70回記念展と先生の遺作の同時展示は、最も好きな月といわれていた11月に逝かれた先生の大きな無言のメッセージ、これから70年も「純粹なる精神」で「ただ良い絵を描くこと」と受けました。

私は昨年の図録の巻頭言に、ここ数年間は新制作の大きな節目あるいは「橋渡し期」と述べました。それに加えて先のメッセージが発せられたのです。私たち今年の新作家賞の最多得票者に70回記

念賞を贈ることにしておりまして、協友の永田由利子さんが見事にそれを獲得されました。また、出品点数は一、〇〇〇点を超えて一、〇三〇点（出品者数三九七名）となって、しかも毎年五、六〇点は混在していました。新制作を全く理解していない作品は皆無で、全作品が全力投球でした。これは全員が記念展そして来年の国立新美術館への移転、〈新しい70年〉のはじまりを射程に入れ、また意識された現象であつたとみています。一方、入選二七二点（入選者数二七〇名）はやや厳しい結果となってしまいました。作品は皆大きくなつて（制限一杯）、その上、一、〇〇〇点以上を審査することは今後のシステムでは限界にきていました。大作主義は必ずしも絵画の本質とはかわりません。私見ですが、音楽で交響曲と室内樂が分化しているように、そろそろ大作と中作（タブロー？）に分けて公募し、審査することも必要かと思っています。

来年からは展示スペースが今の一・八倍になります。多くの真にフレッシュな作品のみが会場を満たすことを期待しています。

（絵画部会員）

第70回記念 新制作展を終えて

実行委員長 中垣克久

誰が言い出したのだろう、69回展が終わって間もなく、70回展を記念展として

次には、80歳以上の会員の方々に70回を記念して後進の会員である我々の気持ちをと思い、スペースデザイン部の佐伯和子さんに手作りマフラーを作つて頂き、素敵な贈り物として差し上げることが出来ました。

そして、彫刻部の企画としては、記念賞として佐藤忠良さんに小品を頂き、賞



70回記念展を終えて

日高單也

70回の記念展を迎えて、まず思ったことは、「激動の70年間を、よく今日まで質の高い展覧会として維持できてきた」とである。これは正に先輩会員の方々のお陰であると感謝しなければならない。

私が新制作SD部に初出品し、同時に初受賞した年は、旧東京都美術館での最後の展覧会の年であった。スペースデザインの作品は彫刻作品と同一の空間に展示されており、そこは自然光が入る大彫刻室で、天井も高く、落着きと品格のある展示空間であった。その翌年からは現在の東京都美術館に移り、三部がそれぞ

やつてみようじゃないかと委員会で声が上がり始めた。遅いスタートで果たして間に合うだろうか心配であったが、私は何となく自信の如きものがありました。

始めに、記念図録として4月23日、佐藤忠良さんの大きなアトリエで「新制作70回展を迎えて」というテーマで、佐藤忠良さん、荻太郎さん、赤穴宏さん、小野かおるさん、澄川喜一さんにお話し頂きました。記念式典の約五百名の大パーティーを大して失敗もなく、またいくつかのイベントを一つにまとめて何とか無事大過なく終えられたのは、会員諸氏はもとより、関係者のお力添え、ご協力の賜と深く感謝申し上げ、報告に代える次第です。

（彫刻部会員）

杯にすることが出来ました。佐藤忠良さんの会に対するお気持ちに感謝いたしました。また、展示は創立会員の作品、パネルを中心、会員と一般出品者の作品を別々の会場に展示しました。創立会員の展示は労多しくして功もまた多しといった結果となり、70回記念展にふさわしい内容になりました。

れに馴れない空間での展示とあって、さ
まざまな苦労があつたようを感じている。



71回展からは33年間にわたる東京都美術館から巣立ち、国立新美術館に移る。そして再びSD部作品と彫刻部作品とが同一のフロアー展示となる。

新美術館への移転を契機に、スペースデザインの今後の発展を考えるとき、本來の建築的作品の発表形態の工夫もさることながら、もう少し幅広いデザイン分野の発表の場となることの必要を感じる。たとえばランドスケープデザイン、インテリアデザイン、インスタレーション、光や映像を取り入れた生活空間への提案、また工業技術や新素材の利用・応用をアートに展開させたものなど、これからのおデザイン界に刺激や興味を与える分野がもっとと登場してほしいものだ。これらは21世紀に生きる「デザイン」の発表活動並びに発表空間を提示するスペースデザイン部会員の役割の一つであると私は思つてゐる。

(SD部会員)



「TO THE SKY」

* 受賞作家展 *

《お 知 ら せ》

70回展新作家賞受賞による受賞作家

展を左記のとおり開催いたします。開催初日にはオープニングパーティも行います。皆さまのお出でをお待ちします。

■会期 07年1月15日(月)～25日(木)
■会場 ごらくギャラリー
☎ 03-3571-3706

■会期 07年2月26日(月)～3月10日(土)
■会場 ギャラリーセイヒョウ
☎ 03-3573-2468

■会期 07年9月、国立新美術館での第71回新制作展で開催。
☎ 03-3405-2531

伝 言 板



計 報

▼大國章夫氏（絵画部会員）

二〇〇六年十月三日、逝去されました。

享年八十三歳。

心よりご冥福をお祈りいたします。

あ と が き

▼いよいよ来年度からは新会場の六本木。本紙来春号は例年より早く発行、頁数も増やし新会場情報を届ける予定です。

会報編集委員 絵画部・佐々木宗實・山口都／彫刻部・藤森民雄／SD部・中野威

(吉國写真室)